

ロバート・オーウエンの労働交換銀行

手塚 壽 郎

一

ロバート・オーウエンは一七七一年五月十四日 Montgshire Severn の河岸の、人口一千ばかりの村落 Newtown に、馬具職人の息子と生れた。十歳の時四十志を懐にして郷關を出で、倫敦なる兄の下に行つたが、兄の一友人の世話する所あつて、彼は Stamford の一商人 James Mc Guffog の小僧となつた。Mc Guffog は僅かに二志の財産より身を起したる人であつて、其健實なる人格と奮闘心が、オーウエンに影響せることは甚だ大である。後彼は更に見識を廣むる爲めロンドンに向ひ、薄利多賣主義を標榜せる日用品商 H. H. H. 商會に入つた。更に彼はマンチエスターに至り、一綿布商に雇はれ、十八歳まで止つた。友人の Jones なる人新紡績機の製作を企て、協力者を求めしかば、

彼は之に組し、後獨力小經營を行ひつゝありしとき、其經營に於ける奇才を認められ、Drinkwater 紡績工場に入りて支配人となり、五百人の労働者を指揮するに至つた。それは彼が十九歳の時である。工場の經營に忙殺せられ、多くの餘暇をもたなかつたが、彼はマンチエスター・コレツヂに於ける醫師ダルトンやクローリツヂなど云ふ人々の講演を聞くを好んでゐたと云ふ。科學・道德・宗教等を論じた此らの講演會の討論に於てオーウエンは總ての宗教を攻撃した。彼は之らの討論會に於て、人間を生きたる自働機械即ち自然と社會とに依て、推論の目的の爲めに、作られたる推論の機械となしたるが爲め、「The reasoning machine」の綽名を與へらるゝに至つた。彼はマンチエスターの文藝哲學會員となり、此會合に於て初めて演説なるものを行ひ、紡績問題を論じたが、それには何らの系統もなく無知と無體裁を表明したのみで、大味憎をつけたと云ふ。これに感ずる所あつて彼は辯説の練習を大いに努め、後年に於て民衆を動かすこと大であつた演説の技倆を磨くに至つたのであると云ふ。博識にして遜讓なる名士のうちに伍して、比較的無學ではあつたがオーウエンは大膽に遠慮なく其所信を述べた。或日この會合に於てラボアヂエ及びシヤプタルの發見に議論が及んだとき、彼は宇宙を大なる實驗室なりとし、人間を複雑なる化合物的組成物なりと説いた。以後人々は彼を呼ぶに The philosopher who intended to make men by chemistry を以てするに至つたと

傳へらるゝ。

Drinkwater の工場に入りて六ヶ月の後、オーウエンは給料を増額し、組合員とせられたき旨を要求したけれ共、Drinkwater 氏の拒絶する所となつたので、此工場を去り、倫敦及びマンチェスターの豪商 Borrodale & Atkinsons 及び Bartons と組合を作つた。オーウエンの經營の下に此會社は大いに繁榮し、蘇格蘭方面にも多くの顧客を集めたので、オーウエンは屢々グラスゴー市に旅行をする必要があつた。これか機會となつて、オーウエンとグラスゴーの或大紡績業者の娘 Dale 嬢との情熱的戀愛となり、結局彼は此戀に成效し、且つ六萬磅の New Lanark 工場を得た。かくして二十九歳にしてオーウエンは此重要なる紡績工場の經營を掌握するに至つたのである。

幼き十歳のときより商賣に馴れたオーウエンは商業に巧みではあつたが、他方に於て紡績工場の經營者として、彼は十八世紀末を記したる産業革命を具さに見たのであつた。げに當時紡績業は大工業の唯一の領域であつたのである。オーウエンはワット及びアークライトの發明に困りて生じた機械の使用と生産力の増大より生れ出べき社會的結果を觀破したのである。彼の思想が受けたる第一の印跡は事實によりて與へられたる教へであり、此事業上の實踐的教養である。これらは彼の感傷的性質と結合し、時代の主理的精神と結合し、彼の氣風と學說とを作り成したのである(註)。

(註) 以上 L. Jones, *Life of R. Owen*, pp. 7 et suiv., E. Dolléans, R. Owen, pp. 59 et suiv. 及び上田貞次郎博士著産業革命史研究第二二三頁以下、並に Padmore, R. Owen 等に據る。

一般にオーウエンは只一つの思想しか有つてゐなかつたと云はるゝ。彼自ら自叙傳中に彼は根本的一原理を有して、それより總ての結果を導く者なることを認むる。彼のあらゆる著作の到る所に、『人の品性は原料の産物に過ぎぬ。』と繰返へさるゝ。謂ふ所の意味は人間の品性は環境の産物なりと云ふにある。一八〇〇年獨立して經營を營むに至るや、彼は此環境論を以て其使用人に對する彼の行爲の指導原理となした。同じ思想が彼の一生を貫流するのである。彼は自叙傳に述べて云ふ、『余は多くの經驗を經、多くの國々を見、様々なる社會階級のうちに經過して今八十六歳に垂んとするるのであるが、今に至りて尙強く余の精神に刻まれたる一所信を繰返し強調せざるを得ない。人間の原理と實行との根本的變更をそとにしては、政黨・宗教等の改造と云ふが如き哀れな計畫は啻に價値無きのみならず、宇宙に於ける善良・全知と幸福との即時的實現に障礙となるものである』(註)。

(註) Owen, *Autobiographie*, p. 77. オーウエンの著書中余が小樽に於て利用し得るものは、*The Revolution in the Mind and Practice*, 1849 と自叙傳とのみ。故にオーウエンに關して本章中に引用せらるゝものゝ多くは、Dolléans, R. Owen; Cole, R. Owen, 1925 等より孫引きするものにかゝる。切に讀者の諒恕を願ふ。

六十年の間オーウエンは、彼が根本的誤謬なりとして攻撃する人間の自由と責任とに對する信仰

を打破せんことを己の使命と信じたのである。彼自ら自叙傳中に述ぶるが如く、人間は其徳及び其罪惡の主ゆゑであり、従て神と人間との前に各の行爲と各の性質との責任を有するものであるとの信仰を打ち破るべきことを、遇ふ人毎に説き明かすのを彼はその使命と考へてゐたのであつた(註)。彼によれば此信仰こそ、人間が苦しむ總ての惡を生む根本的誤謬なのである。

(註) Owen, Autobiographie, p. 75.

オーウエンに據れば、人間は受働的に外的事情の強い影響を受くるものである。品性は自然と社會との産物である。自然は善にして、社會は惡である。惡は制度にありて人間にあるのではない。社會のうちに於ける人間の苦悶と貧乏とは、人間が政治し、政治せらるゝ方法より出づるものである。かく品性は社會的環境の産物であるから、人間の生活を改造せんと欲せば、社會的環境を改善せねばならぬ。社會は自然の法則に反する不合理なる基礎の上に立つ。現在の不合理なる組織に代ふるに全く新なる組織である合理的組織を以てせねばならぬ。オーウエン曰く、『自然は我ら人間が欲する總ての物を豊富に生産するに充分なる地面を我らに與へてくれた。我らは之を知らずして、葡萄を植ふべき所に荆棘を植ゑたのである。』(註一) 人間の品質は外的事情によりて作らるゝ柔軟なる捏粉の如きものである。品性の出來損ひは制度に因るものである。故に人間を善良・聰明に

して幸福なるものたらしむるには、外的事情と制度とを改むれば足るのである(註二)。「外的事情の統制に依りて、我らは此世界に於て容易に確實に、人間をして善をなさしめ又は惡を爲さしむることが出来る。」(註三)而して人間を形成する外的事情のうち最も有力なるものは教育である。「數學の原理と同じく確かな原理が如何なる品性の形成にも適用せらるゝことが出来る。」(註四)

(註一) Owen, A New View of Society, dans "Life of R. Owen" par lui-même, vol. I, p. 308.

(註二) Owen, The Book of the new moral World, p. V.

(註三) Owen, A New View of Society dans l'Autobiographie, vol. IA, p. 293.

(註四) Owen, Ibid., vol. I, pp. 293 et 297.

さればオーウエンにとりて、教育は社會制度のうちにて最も重要なるものである。國家の任務の第一は總ての個人に適用せらるべき教育の合理的組織でなければならぬ。然し合理的教育組織のみが社會制度ではない。こゝに既にオーウエンの社會改良の目指す所は明であつて、人間を徳と幸福とに導くべき外的環境の人爲的創造である。

彼の思想のかゝる概觀は直ちに彼の思想の起源を指示し得る。彼の社會觀は十八世紀の哲學の論理的演繹の結果である。理性に對する信賴・自然法の信仰・人間及び社會の即時的變更の可能の信仰等、之らは何れも其時代思想を特色付くる特性である。社會的機關の改造の簡單なること、地上

に樂園を實現するに充分なる改造を行ひ得ることは、當時の哲學者・社會改造論者の間に存在せる共通な思想である。英國に於てもフランスに於ても十九世紀初頭の社會主義者が其の組織を作る爲めに據りたるものは、十八世紀に於ける主理主義の哲學である。此の點に於てオーウエンとフリーリエとは好一對である。一見兩者の説は大いに異なるが如くにして、實は其根底に於てのみならず、詳細の部分まで同一である。もとより變化に乏しいオーウエンのシステムと想像の豊かなるフリーリエのそれとの間には少からざる相異を認めねばならぬ。然し此らの相異は自然の法則と人間の感情の善とを信ずる組織、同じ社會的自働主義より來りて無意識に權力主義に導きたる同一の組織の英・佛の現れ方の相異に過ぎない。此ら二つの組織の同一性はフリーリエ自ら説く所である。フリーリエはオーウエンをフランヂの實驗の金主たらしめんとして拒まれたる後、彼を己のシステムの剽竊者であると攻撃してゐる(註)。

(註) Fourier, Pièges et charlatanisme des deux sectes Saint-Simon et Owen.

我らは此類似を、兩者の時代と環境の相似たることによりて説明し得る。兩者共に相接近せる一七七一年と一七七二年に生れ、共に實務に従ひ、——企業者と商舖の使用人たりし相異はあるが——知的環境に、共に同じ主理的精神を汲み、經濟的環境に共に同じく産業革命によりて起されたる同

一の問題を借りたのである。個人の創意に基く實驗の彼方には、共に同じく、理性と自然法に従ふべしとの表面に隠された干涉主義が流れてゐる。

十八世紀に生れ、主知主義の空氣を吸ひたるが故に、オーウエンの理論は其跡を止むべきは當然である。然し此一般的影響の他に、それは彼の讀書によりて直接の影響を受けざりしか否か。オーウエンの著述のうちには、他人の著述の引用がない。彼は書物を輕蔑し、自ら事實のみにしか興味をもたぬ現實主義者なりと云ふ。彼の動的な生活即ち幼きときより自ら其生活の資を得なければならなかつた必要や、彼の職務や、公共事業・博愛事業に對する彼の活動に忙殺せられ、彼は多くの讀書の時間をもたなかつたに相違ない。此の印象は彼の子の Robert Dale Owen が述ぶる所によつて證明せらるゝ。『余の古い記憶に、父が多くの讀書をしてゐたことが残つてゐる。殊に彼は倫敦の二日刊新聞と他の定期刊行物を讀んだ。然し彼は嚴密な意味に於ての研究家ではない。十歳の時より一文なしで働き上げた人である。余は父の書齋に彼の手で記入がしてあつたり、鉛筆で記しつけてある一冊の書物さへ見なかつた。父は書物を讀んでも、其の本質を捕へず、讀み流す習慣をもつてゐた。……統計に關する若干の書籍及び彼の愛書 Colquhoun の「大英帝國の富源」とを除けば、彼が書物にノートを書き入れたのを憶ひ出せない。』(註)

(註) Robert Dale Owen, *Threading my way, Twenty Seven Years of Autobiography*, p. 67.

彼が多くの讀書をなさざりしことに疑はないが、それは必ずしも彼が同時代の若干の社會主義者の影響を受けなかつたことを意味しない。ゴツドウンの“Enquiry concerning Political Justice”の如きは無意識にかも知れぬが、著しい影響をオーウエンに與へてゐる(註一)。彼が十八世紀の哲學と環境論を得たのは、ゴツトウインの著述からであると云ふ(註二)。政策に就ての結論を除けば、オーウエンの一般思想とゴツドウインのそれとの間には著しい類似があつて、ゴツドウインのオーウエンに及ぼせる影響は疑ふべからざるものである。實に“Political Justice”の第一編第四章“The Characters of Men originate in thier External Circumstances”はオーウエンの思想の基礎をなすものである。

(註一) Dolléans, R. Owen, p. 89.

(註二) Dolléans, *Ibid.*, p. 90.

ゴツドウインによれば、人間の行爲と品性は外的事實の産物である。外的事情のほかは人間の精神に作用し得る事實は、生得の原理(*innate principles*)、本能及び生れつきの生理的事實であるが、生得の原理に就ては議論の餘地大いにあるべく、後二者は人間の品性の形成に對し觀過し得べき影響

しか與へないものである(註一)。ゴツドウイン曰く、『生るゝに當りて人間の間に存する原本的相異は數學的に云へば計算のうちに入れられねばならぬが、然し重要なるものと考へ得られないものである。』(註二) 品性は教育によりて決定せられ、その欠點は教育によりて矯正せらるゝを得る。但しゴツドウインの所謂教育は頗る廣い意味であつて、我らが統治せらるゝ政治の形式より受くる思想の變化も、彼が政治的敎育と名くる所のものである。

(註一) Godwin, Enquiry, ed. 1796, vol. 1, pp. 27 et suiv.

(註二) Godwin, Ibid, p. 4.

ゴツドウインは開卷忽ちにして環境論を説き、敎育と政治的制度とが品性に及ぼす影響を高唱する。然し乍ら社會的制度其ものを變化することは可能であらうか。然り、もし理性に訴へて意見 Opinions を變化せしむるときに、それは可能となるべしと云ふ。

ゴツドウインによれば、人間の意志的行爲は其意見より出づるものである(註一)。人間の行爲を支配する者は理想である。人間の意志的行爲は其知識の演繹に一致する(註二)。此根本思想より彼は五個の系を導く(註三)。

一、健全なる推論は眞理に至らしめ、誤を避けしむ。此命題は自明である。蓋し健全なる推論と

詭辯との間の戦の勝利は定まつてゐるからである。

二、健全なる推論と眞理とを他人に傳へることが出来る。

三、眞理は全能である。

四、道徳的弱みは打ち勝たれ得ないものではない。蓋しそれらは無知と誤謬とに基因するものであるからであり、眞理は此らを消失せしめ、且つより崇高にして有益なる原理によりて代らしむることが出来る。

五、此命題は他の總ての命題より結果するものであり、人間に完全可能性あるものなることである。

(註一) Godwin, Enquiry, vol. I, p. 62.

(註二) Godwin, Ibid., p. 86.

(註三) Godwin, Ibid., pp. 87 et suiv.

斯くの如く、オーウエンの思想の根本的基礎を成す環境論、理性の力による人間の完全可能性、道徳の必然性と無責任論等はゴッドウインのうちに見らるゝ。

然しオーウエンの理論を生ぜしめたものは、彼の時代の哲學のみではない。先づ彼の眼に映じた

る機械的工業大工業の發展と社會問題等が彼の感傷的なる胸を衝いて、勞働階級の貧困に對する救濟策を考ふるに至らしめたのである。換言すれば、彼の事業上の經驗が彼の思想に與へたる影響の方向は奇しくも彼が當時の思想界より受けたる方向と一致したのであつた。彼が工業主として得たる精神の習慣、例へば工場に於て人間が機械の一部の用をなし、そして其機械は自動的に運行するを見るを日課とせることは、社會的自動主義の傾向を彼の精神に強からしめたに相違ない。

されば彼の時代の思想界と彼の事業とは、よく彼の社會主義の特色を説明し得るのである。彼の社會主義は三つの特色を帶ぶ。即ちそれは機械的であり、主理的であり、農業的である。

オーウエンの社會思想は機械的である。彼は社會を機械組織の如く考へ、其制度の組織と内容を勝手に變化し得べきものと見る。彼は社會の改良はより多くの幸福を齎らすべき新なる機械の發明であるが如くに考ふるのである。此の點に於て如何に多く彼が其工場主としての生活の影響を受けしかは、彼の用語を以ても之を伺ふことが出来る。まことに彼は社會組織を“new machinery”と呼び、教育を“manufacture characters”と云つてゐる。彼は品性を恰も生産物の如くに製造せられ得る物と考ふるのである（註）。品性の不出來の責任を負ふ者はひとり制度である。人間の性質は社會的幸福の製造者が自由に作り得べき材料の如きものである。外的事情が人間の品性を支配すること

四邊形の建築が其建築物の形を決定するに等しい。社會組織の此機械的觀念、人性の受働性と可鍛性の思想はオーウエンの社會主義に人爲的性質を與へ、自ら國家主義に導いたのである。國家こそ劃一的教育によりて總ての人の品性に形を與へ、調和を實現すべき道德的統一を作り得るものではないからうか。社會組織は個人の偶然性の介入なく作られ得るものであらう。

(註) Owen, *The Revolution in the Mind and Practice of the Human Race*, pp. 74 et suiv.

オーウエンの社會主義は機械的になると同時に主理的である。彼は總てを措いて先づ理性に訴へるのである。それあるが故に彼の社會主義は機械的社會觀の論理的歸結たる國家主義より逃れ得るのである。

彼によれば、社會組織は自然の法則に一致せる社會の合理的組織である。『*The Book of the New World*』に於てオーウエンは政府の一般的構成とその普遍的法典とを考へ、『*The Revolution in the Mind*』に於て永久的・普遍的政府の規準を再述し、普遍的憲法と法典とを考へる。此普遍法、此適用に依りて人間の状態を變化し貧窮を消滅し得べき此普遍法は、自然の法であり、其自明なることは理性が示してくれる。故に社會組織を理解せしむるには、人間の理性に訴へ、私人の計畫の下に實驗を行へばよい譯である。然し實驗によりて社會組織の一部を試みて其效益を説明する必要がある

るにしても、それは社會的權威と力との信仰を明にする爲に他ならぬ。オーウエンは之によりて、不合理なる社會組織及び教育組織のうちに品性を變ぜられたる個人を説伏するよりは、寧ろ施政者に道を示さんと欲したのである。かくて遂にオーウエンが人間の幸福の完全なる實現の崇高なる希望を置ける者は、選まれし者の理性によりて照らさるゝ政治的權力である。而も尙干涉は理性の聲の傾聽せられざる時に限らるゝ。かくてオーウエンに於ては、人間の精神に對する理性の力を信ずることゝ、國家崇拜とが調和せられてゐる。後者も亦前者と同じく、彼の國家干涉論を導いた譯である。オーウエンの説の根底には獨斷的なれど奇特なる權力主義がある。此權力主義は彼の環境論を想へば直ちに説明せられ得るであらう。蓋し環境の統制が普遍的善又は惡を生じ得るとすれば、環境の統制を實現するに最も強力なる機關たる國家を、眞理と合理的システムの爲めに使用すべきは當然であるからである。個人にして理性の命ずる所に従はざれば、彼に對し如何なる強制を加ふるもよいではないか。人間は無定型のものであつて、我らは個人が欲すると否とに拘らず、彼らを幸福たらしむる權利あるものである。

最後に十八世紀より出でし凡ての社會主義の如く、オーウエンの社會主義は農業的である、フーリエの Le phalanstère と同じく、オーウエンの社會組織の細胞たる小さな村は先づ第一の仕事とし

て農業を營む。工業は附隨的に入り來るのみで、且つ農業に附屬するものとせらるゝ。此農業の尊重は經濟的事情と感情的事情とに依りて説明し得らるゝ。即ち農業は經濟の根本的現象であり、凡ての富の根源であることは勿論、彼の説を常に支配してゐる道德の考へが農業の尊重論に預つたことも疑を容れない。農村生活と自然への復歸は十八世紀の知的流行の一であり、社會小説は概ね田園詩・田園劇の形式を採つたものであつた。自然なる語の二つの意味の混同によりて、人は自然に接するとき最も善良なる者に、農業に親むとき自然の法に近き得ると考へられたのであつた。

オーウエンは永い生涯の間社會組織の改造の實驗に幾度か失敗を重ねつゝも毫も失望することがなかつた。實際の生活が彼の思想の誤れることを明に證明しても、尙且つ彼は彼の組織の價值を疑はない。不成效は第二次的事情、眞理に對する一時的無理解より生ずるものであると考へてゐた。何れの企ての初にも終りにも、New Harmony の實驗の先にも後にも、また労働交換銀行の實驗の先にも後にも、彼は人類の爲めに新なる時代の出現を説くのであつた。

例へば「The Crisis」(定期刊行物、April 14, 1832—August 13, 1834)の消滅後「The New Moral World」(定期刊行物、Novembre 1, 1834—Zenovier 10, 1846)の第一號に彼は新なる道德的世界の出現を説くのである。「如何なる形式の虚言も存在の意義なき世界、貧乏と非人道の知られざる世界、

總ての財が豊富に生産せらるゝ世界、奴隷と服従とが影さへ絶ちて大なる自由と密接なる結合との調和せる社會、愛によりて幸福の生ぜる社會、愛と理性とが人類の運命に聰明に働く世界、苦しい勞働のものはや無用なる社會、富の生産が快樂と喜悅の永遠の泉たるべき世界、人類と云ふ大家族に與ふる一般的幸福の量を多くしたることによりてのみ他の人々と區別せらるゝ社會、一言に云へば次の時代より無知も無く、貧乏もなく、又慈善もなく、また戦争もない社會が出て來るであらう。』(註)

(註) The New Moral World, 1er novembre 1834, cité par Dolléans, R. Owen, pp. 105—106.

七十七歳の高齡に達して尙、オーウエンは一八四八年二月二十七日佛蘭西の男女に一文を送りて曰く、『友よ、今重大なる責任が諸君の頭上にかゝり來つてゐる。諸君は眞理にのみ基礎付けらるゝ新政治、世界の模範となり人類に恩惠となるべき政府を作り得る。諸君は今佛蘭西に慈愛と平和と幸福とを打ち立つるに、何れの國民の歴史にも見ることの出來ない極めて都合よき状態にあるのである。』(註)

(註) La Voix des Femmes, 25 mars 1848, citée par Dolléans, op. cit., p. 107.

オーウエンの社會主義が感傷的社會主義と云はるゝ所以は、彼の此普遍愛、此不撓の樂天主義を合むからである。彼の事業上の見事なる成效は、彼の生來の性質と相俟ちて、彼の思想は常に眞理

たることを強く彼に思はしめたのであらう。

オーウエンは其生涯を擧げ、其活動と財産とを擧げて社會的實驗に従つた。此らの實驗は種々ではあるが、何れも彼の組織的思想の實現を目的とせるもので、彼の社會哲學と社會の合理的組織との實驗に動機を發するものである。八十七年の間、彼の思想は明に統一をもち、常に同じ目的と同じ方向とをもつてゐたのであつた。尤も其現れ方は種々であつた。一八〇〇年・一八一九年には使用人の生活状態を改善せんとし、其試みが雇主の觀迎を受けなかつたから、その實現は國家の手に據らざるべからずとして彼は共產主義的組織を考へ、農村を以て社會組織の細胞となさんとし、New Harmony の實驗を企てたのである。一八三〇年には價值の正しき尺度を作り、労働切符を金屬貨幣に代へんとした。此試みである労働交換銀行が失敗に終るや、不生産階級に對する生産者の大結合を説いたのであつた。

本編の取扱はんとするは此労働交換銀行に據りて行はんとする金屬貨幣廢止の試である。オーウエンの此企は此種の試の最初のものであると云ふ(註)。

(註) Auncy, Les systèmes socialistes d'échange, p. 35. バルグレーアの辭書には似寄つた試みがオーウエンの影響の下に以前にあつたような記載があるが、筆者は之が證索の資料をもたない。

二

オーウエンの交易組織の改造の目的が當時の社會の害惡と貧窮とを絶滅せんとするにあつたことは云ふまでもない。それは“Report to the County of Lanark, 1820.”に最も明に示されてゐる。此報告は貧窮救済の方法の考究のみを目的とする The Upper Ward of the County of Lanark が任命せる委員會への報告たるの形式を採つてゐるが、その範圍を越えてオーウエンの社會觀を最もよく表してゐるものである(註一)。此報告に於て彼は云ふ。『かくの如くにして知識と科學より得らるゝ援助の自然的効果……は社會の富と幸福とを増加し、從て總ての人が其恩惠に浴さねばならぬことであると思はるゝ。然しよく人の知るが如く、此有益な効果は存在しない。寧ろ効果は反對であつて、人口の大部分を成す勞働者階級はかつて得たりし愉快をも得る能はず、而も彼らの貧窮によりて誰も利益を受くる譯でなく、總ての人々が苦んでゐる。此點を考へて見て、余は勞働者階級の仕事の不足と從て生ずる貧窮とは新しい生産力の急激なる増加に因るものであると思はざるを得ない。社會は此増加に對し適當なる對策を講ずるを忘れたのである。……科學的・機械工業的・化學的力の増加の直接的効果は富を増加することである。故に勞働者階級の仕事の不足の直接的原因はあらゆる

る種類の富の生産の過剰であり、世界の全市場に貨物の多さに過ぐることである。もし市場が見出さるゝならば社會の富は大いに増加するに相違ない。』(註二)

(註一) 一八二〇年前のオーウエンの思想に就てH. Cole, R. Owen, p. 129 et suiv. 參照。

(註二) Owen, Report to County of Lanark, The Life of R. Owen, vol. IA, pp. 264—266.

さればオーウエンに據ると機械の使用を減ずべきでもなく、また幾百萬の人間の生命を犠牲にすべきでもない。我らは労働者に仕事を與へねばならぬと同時に、機械は労働者を助け、労働者に代らねばならぬ。故に問題は二つであつて、二つの對策を見出すことにある。労働者に仕事を與ふるのみにては不充分であつて、我らは生産物の市場をも見出さねばならない。

生産物の市場の欠乏は労働者の受くる報酬が過小なるに因るものである。『全世界の市場は一に全く労働者階級の労働に對して與へらるゝ報酬に頼るものであり、市場の大いさは此報酬に比例する。然し現在の社會は労働者が其労働に對し正常なる報酬を受くるを許さしめない。市場の欠乏はこれより生ずるのである。』(註一) 然らば労働者は何故に正常なる報酬を受くることが出來ないのであるか。金屬貨幣があるからである。とオーウエンは云ふ(註二)。金屬貨幣こそ惡の根源である。金屬貨幣は人爲的價値の尺度であつて、増加し行く富を表し得るものではない(註三)。

(註一) Owen, Life of R. Owen, vol. IA, p. 270.

(註二) Owen, Ibid., p. 266.

(註三) Owen, Ibid., pp. 266 et 277—278. 此意味は明ではない。彼は貨幣の所有者即ち貨銀を支拂ふ者が掠取すると明に云ふでもないようである。恐らく富が増加して物價が下つたことを理由として、貨銀が低下せらるゝと云ふ意味であらうと思はれる。

そこでオーウエンは生産物の市場を求むるには價值の人爲的尺度たる金屬貨幣を捨て、價值の自然的尺度たる労働を採らねばならぬと説く。『價值の自然的單位は原則として人間の労働即ち人間の働ける肉體的並に精神的勢力である。』(註一) 今日に於ては、『科學的的目的の爲めではあるが馬の生理的勢力と同じく人間の生理的平均勢力も知られてゐる。同じ原理に依りて人間の労働の平均量も知られ得るであらう。而して労働は總ての富の本質を成すものであるから、生産物の價值は確定せらるべく、從てまた他の總ての價值との交換價值も確定せられ得るであらう。』(註二) 而して労働なる此自然的價值の尺度を採れば、『労働の生産物の交換は何らの障碍と制限無く行はれ、富は大いに増加し、それ以上の増加は無用にして欲せられざるに至るであらう。』と(註三)。

(註一) Owen, Autobiographie, vol. IA, p. 268.

(註二) Owen, Ibid., p. 268.

(註三) Owen, Ibid., p. 271.

かゝる根本思想より出でし金屬貨幣廢止に關するオーウエンの具體的方策は、彼の叙述に倣つて労働者に仕事を與へんとする方策の後に、之を尋ぬるが便利であらう。オーウエンは生産物に販路を開くのみを以て足れりとせず、直接に労働者に仕事を與へんと欲する。即ち彼は此目的の爲に、耕作に用ひらるゝ牛馬鋤 the plough, la charrue を手鋤 the spade, la bêche に代へ、且つ新しい労働組織を實驗すべき農村を設けんとする。先づ彼は手鋤の耕作は牛馬耕より收穫を多からしむるものであり、収益を増すものであるが(註一)、現在牛馬耕が用ひられつゝあるは因襲によりて動く頑迷なる人々の無智なるに由るものであると云ふ(註二)。もとより「一頭の馬に八人又は十人の人を代へねばならぬ」(註三)が、之に依つて却て「我らは貧乏なる労働者に——其數が如何に多からうとも——來るべき幾世紀の間永久に利益ある仕事を與へることが出来る。∴現在大英國と愛蘭とを併せ耕地約六千英町あり、耕作(牧畜を含む)に従事する労働者は約二百萬にして、之によりて直接に生活する者は其約三倍であり、それが供給する食物は一千八百萬人を養つてゐる。然るに此ら六千英町を手鋤にて耕作する時は少くとも六千萬の労働者に健康に宜しき利益ある仕事を與へ、優に一億の人口を愉快に生活せしめ得るであらう。」(註四)

(註一) R. Owen, Autobiographie, vol. IA, 271.

(註二) R. Owen, *Ibid.*, p. 273.

(註三) R. Owen, *Ibid.*, p. 276.

(註四) R. Owen, *Ibid.*, pp. 276 et 275.

次に彼は現在の労働組織を變更せんとする。彼は農業と工業とを引離し、後者を過重視せしむるに至りたる分業の組織を排斥する。農業より獨立せる工業は、人間を自然より遠からしめ、労働者より食物を分離せしめて仕舞つた。『社會は書齋に立籠つた理論家の爲めに誤られて、實行に當り可能なるあらゆる誤を犯した。然し労働者と食物を分離せしめ、労働者の生活を他人の労働と不確なる供給とに従屬せしめたことほど大きな誤はあるまい。……全人口が農業に従事し、工業が附隨たるときには、與へられたる地方に於て、農業者と工業者とを分離せるときより遙かに多くの人口を、遙かに愉快に養ふことが出来るであらう。』(註一) 然し如何にして人口に農村に對する愛着を感ぜしむべきであるか。彼は此目的の爲に實驗を示して無知なる人々を動かせばよいと考へたのである。彼は常に理性の萬能と眞理の自明を信じたるが故に、かく考へたのである。彼は百姓の聯合と模範的農村を作り、人々をして之に倣はしめんと欲したのである。『此らの新しい聯合の設立は同様の聯合を他の到る所に設けんとする社會一般の希望を誘起し、其數が急激に増加し行くべきことは、今

より豫言して誤とはなるまい(註二)。……新組織の下に形成せらるゝ個人の品性と行爲と快樂とは、直ちに、新事業が舊事業に優ること遙かなる生ける例となり、舊社會とそれに屬する總ての物とは次第に死滅するに至るであらう。』(註三)

(註一) Owen, Autobiographie, vol. IA, p. 282.

(註二) Owen, Ibid, p. 303.

(註三) Owen, Ibid, p. 289.

オーウエンの農村は最低三百人、最高二千人より成り、八百人乃至千人が最も適當であると云ふ(註一)。土地に就きては、『労働者は充分の食料及び其生存に必要な一切の物と公共の必要に徴收せらる生産物とを收穫し得るに足る面積を與へられねばならぬ(註二)。此面積を半英町より一英町半とし、千二百人の農村が必要とする土地をオーウエレは六百乃至八百英町と計算する。家屋や其他に就てもフリーリエの農村に見るような詳細な記述がある(註三)。

(註一) Owen, Life of R. Owen, vol. IA, p. 282.

(註二) Owen, Ibid, p. 282.

(註三) Owen, Ibid, pp. 283 et suiv. オーウエンが家屋の構造に至大の注意を拂つたのも、彼が品性の形成に外的環境の影響大なることを認めたからである。

資本の額等に就ての詳細な記述は、『Report to the Committee of the Association for the Relief of the manufacturing and Labouring Poor, March, 1817』(註一)にあり、Report to County of Lanark にはそれは概略に止められてゐる。然し後者のうちにも、如何にして必要なる資本を得べきかの問題が取扱はれてゐる。彼の訴ふる所のものは、私人の企業家であるが如くである。彼は云ふ、『新なる農場其他一般の施設は土地又は資本家・公共の目的に使用し得る資金を有する既設の會社・貧民救濟の負擔を免れんとする教會區 parishes and counties・中産農民・農工労働者等現在の組織の弊害を免れんと欲する者によりて形成せらる』と(註二)。去り乍ら我々は同じ Report の劈頭に彼が次の一句を強調したりし事實を思はねばならぬ。『After the most earnest consideration of the subject he has been compelled to conclude that such employment cannot be procured through the medium of trade, commerce, or manufactures, or even of agriculture, until the Gouvernement and the Legislature, cordially supported by the country, shall previously adopt measures to remove obstacles, which, without their interference, will now permanently keep the working classes in poverty and discontent, and gradually deteriorate all the resources of the empire.』(註三) 一八一七年の報告に於ては干渉主義の傾向は議論の餘地なき程明白である(註四)。故にア・メンガーがオーウエンは新しい社會を自由なる聯合により、

單に私法上の契約を變化して設立した者である(註五)と云へるは誤である。オーウエンが私人的企業に訴へたのは、それに依る實驗を導火線と考へ政府に道を示さんとしたに過ぎぬ。結局に於て改革案の實現と其一般化とは國家が爲すべきものである(註六)。

(註一) R. Owen, Autobiographie, vol. IA, pp. 53 et suiv.

(註二) R. Owen, Ibid., vol. IA, p. 299.

(註三) R. Owen, Ibid., vol. IA, pp. 263—265.

(註四) R. Owen, Ibid., vol. IA, p. 62.

(註五) A. Menger, L'état socialiste, trad. franc., p. 168.

(註六) Dolléans, R. Owen, pp. 214 et 221 et suiv.

Report to County of Lanark には、農村の内部的組織及び分配の原則に就ての記述は殆んどない。恐らくは新組織の下に於ては生産は著しく必要を超え、各人は欲するがまゝに欲する所の物を倉庫より得らるゝと考へられたに由るのであらう。オーウエンは彼の農村に於ける生産が優に必要を凌ぐに至るべきを高唱する。『我らの間に何らかの意義をもつてゐるあらゆる種類の富は容易に我らの欲望に超過するに至るべく、我らは此らの物を自らの爲に集積する慾を失ふに至るであらう』(註)。

(註) Owen, Autobiographie, vol. IA, p. 302.

オーウエンは生産物が豊富となるべきことのみを説き了つて、直ちに餘剰の生産物の交換を如何になすべきかに移り、如何なる過程によりて、此らの交換せらるべき物が個人の手に入るべきものなるかを説かない(農村と農村との交換には之を説く必要のないのは明であるが)。されば Report to County of Lanark に彼の労働交換銀行の思想の起源を求め、その報告中に現るゝ彼の思想のうちを占むる労働交換銀行の地位を求めんとしたる筆者は、若干の飛び越しを餘儀なくせらるゝ。恐らくは、農村の人口の維持に必要な物の生産は各個人の適性を考量して當局が之を命じ、消費は之を各個人の欲望に應ぜしめ、そして命ぜられたる生産を了れば、各人をして自由に自ら欲する物を生産しそれを其者の所有物たらしむることが彼の考へであつたのではなからうか。彼の所謂 *Ex-blisements* を聯合内の一小生産消費単位と見らるれば、彼の理論に飛躍はないであらうが、かゝるテキストもないようである。もし又オーウエンが労働を價值の尺度することのみにて各個人の生産を増し得ると考へたとすれば、彼の所謂農村は無意味であらう。されば彼が飛び越したる部分を埋むるに、我らはオーウエニズムの最も定形的記述なりと云ふ *The Revolution in the Mind and Practice & Supplement (1849)* を參酌し(註)、筆者の如き解釋を以てせねばならぬ。

(註) Dolléans, R. Owen, pp. 220et suiv.

餘剰の生産物（命ぜられたる生産物）を作れる者は（註一）、之を農村附屬の倉庫に寄托し、『英蘭銀行の新紙幣と同じ原理に基いて作れる労働價値の紙幣』（註二）を受くることが出来る。此紙幣は寄托せる生産せる生産物の内在的價値（労働價値）に限りて發行せられ、内部の（農村内部の意なるべし）商業・交換 domestic commerce or exchanges に用ひられる（註三）。

（註一） 余が解釋する意味の餘剰に非ずして、單純に生産物のうち、自己の消費に供せざる生産物を思はしむる記述もある。

Voir Owen, Autobiographie, vol. IA, pp. 303—304.

（註二） R. Owen, Autobiographie, vol. IA, p. 304.

（註三） 農村と農村との間の交換も労働價値に依つてなざるべきであるか否やに就ても正確な記述がない。

かくの如くであるから我らはコールと共に“as early as 1820 he had not only put forward the theory that labour is the true meswre of the value of commodities, but also urged the practical application of the principle to commercial dealings”と云ひ得るが（註）、労働交換銀行の思想は既に一八二〇年のオーウエンに明であつたとは云ひ得ない。

（註） Cole, R. Owen, p.

三

其後オーウエンがアメリカに渡りて所謂 *L'expérience de New-Harmony* に失敗して歸國するまでの間に、彼の價值觀と交易組織觀とが如何に展開せられたか、また實行上に如何に應用せられたか、筆者は之を知り得べき資料も、また之を記述した書物も知らない(註一)。筆者は一躍して一八三二年の「*The Crisis*」に赴かねばならぬ(註二)。

(註一) 此間に彼の思想の影響を受けたと思はるべき交易組織の多少の實驗の行はれたことが、バルグレーヴの辭書に書いてある。パドモーアの著書にも多少の記述がないではない。

(註二) 遺憾乍ら此「*The Crisis*」をも孫引せねばならぬ。

New-Harmony の實驗に失敗し、他の實驗を始むべくして能はざりしオーウエンは一八三〇年々頭の歸國後(註)、現在の社會組織のうちに彼の組織の若干部分を導き入れ、以て勞働を價值の尺度とし、生産物の販路を開き、勞働者に間接に仕事を與へんと欲したのであつた。彼が歸國の當初、所謂組合運動なるものを輕蔑した事實を思へば、彼が組合運動の新先鋒となつた理由の一つは、組合の生産物の販路を、勞働を價值の尺度となすによりて、展開せんことにあつたと思はれる。

(註) Padmore は之を一八二九年なりとする。Voir Padmore, R. Owen, t. 2, p. 393.

生産物の交換に於て勞働を價值の尺度となさしむる爲めに、勞働交換銀行を設くべしとの思想は

“The Crisis” に最も明に表れてゐるが、労働交換銀行の理論的説明は必ずしも正確なものではないと云ふ。

然し乍らドルレンスが引用せる “Le système [de la valeur-travail] n'est pas seulement applicable aux individus, mais aux sociétés.” (註一) が真なりとすれば、筆者はオーウエンの一説明を得たように思ふ。即ち彼のシステムに於ては、交換銀行は農村 (此ら農村は sociétés coopératives と見做され得るが故に) の餘剰と他の農村の餘剰を交換するに際し、労働を以て價值を測定するを可能ならしむるものであるが如くである。然し乍らオーウエンのシステムに於ける此労働交換銀行と農村内の個人の關係は、依然として不明である。此労働交換銀行は、現在の社會組織下に於てのみ存在を許さるべき一時的施設なのであらうか(註二)。

(註一) Dolléans, R. Owen, p. 269.

(註二) プルドンの交易銀行の場合にはかゝる疑問はあり得ない。プルドンは交易銀行を組織すれば共產主義を行はずして、労働掠取は無くなると云ふのであるから。

一八三二年六月十六日及び二十二日 “The Crisis” に於て、オーウエンは一八二〇年の報告を展開して再び、貨幣あるが故に現在の社會にありては生産の過剰があるのであると云ふ。『今日の生産力

は我らが欲する總ての富を生産し得るに充分なのである。然るに労働と科學との有難い活動を保證し得べき流通の手段が無いのだ。』(註)

(註) The Crisis, vol. I, p. 50. Dolléans, op. cit., p. 272.

それと同時に、かつて不鮮明にしか現れてゐなかつた思想が、極めて明に畫き出される。即ち現在に於ては貨幣あるが故に資本家の掠取が行はれ、従て又生産の過剰が起るのであると云ふ。「朝早くから起き出でゝは見るものゝ、なすべき仕事を求め得ない者が毎日幾萬人がある。此らの人々は各自の必要とする以上の物を生産するし、他人が生産した過剰のものを必要とするのだ。然るに通常彼らは生産せる商品を貨幣となすに非れば、即ちそれらを資本家又は仲介者に引渡して貨幣を得るに非れば、他人の生産物を得ることが出来ない。……貨幣の少い場合、仲介者が提供せられたる生産物を欲せざる場合には、生産者は莫大の犠牲を拂はねばならぬ。』(註)

(註) The Crisis, vol. I, p. 59. Dolléans, op. cit., p. 273—274.

故に生産者と生産者とが直接の關係をもつに至らば、資本家・仲介者の掠取は消滅するであらうし、生産は過剰であり乍ら、必要を充し得ない生産者の存在する矛盾は解かるゝであらう。詳言すればオーウエンは金屬貨幣を廢止し、労働を價值の尺度となし、生産物に體化せられたる労働を

表す労働切符を以て交換を行ふによりて、生産物と生産物の交換即ち生産者の直接的關係を實現し、生産過剰と共に資本家・仲介者の掠取を除かんとする。労働が價值の尺度となれる曉には、總て眠れる生産力は覺醒せられ、新なる販路が開かれ、仕事の得られない労働者は無くなるであらう。其曉には、『今日の如く我らは其欲望を充足するのに、仕事を得られぬまで待たねばならぬ必要がなくなる。労働して生産物を作り、之を預け入るれば、我らは直ちに欲する物を得る事が出来る。…かつて生産者たるに過ぎざりし者にして、消費者たるに至るべき者幾百萬人なるべきか、計り知り難いものがあらう。』(註)

(註) The Crisis, vol. I, p. 59.

もしオーウエンの考ふるが如く労働を價值の尺度とし、體化せられたる労働量によりて生産物の價值を定むとすれば、生産物の對價として受くべき労働者の報酬は其實際に投じたる労働量に依るのであつて、その生産物の利用には何らの關係がない。而して労働の測定は、直接に之を行ふべき方法無き現在に於ては、労働の時間なる間接の指標に依つて行はれざるを得ない。然らば労働の間はよく労働の量を計量し得るであらうか。労働には質的差異・強度の差異がないであらうか。生産力を減じて労働時間を延長することは必ずしも難事ではあるまい。故に價值の單位即ち労働の單

位は、オーウエンに於ても不正確なものである。これがオーウエンのシステムの第一の欠點である。

第二の欠點は、各生産者は勞働の成果たるものならば如何なる生産物と雖、即ち無用の物と雖之を勞働切符に換ふるを得ることである。勞働を投下せられたる生産物は、無用の物であらうと、將來又將來に於て需要のない物であらうとを問ふことなく、勞働切符即ち他の生産物を受くる権利と換へられる。故に勞働者は其想像に任せ好む所に従ひ、勝手なる物を生産するも、尙之を勞働切符と換ふることが出来る。然るにかくして得らるゝ切符は勞働切符であつて、等量の勞働を投ぜられたる物ならば、如何なる生産物をも要求し得る權利であるから、勞働者は無用なる物を生産したるに拘らず、有用なる物のみを要求する。此要求の一部のみしか充されざるべきは明である。又は勞働切符の下落が起らねばならぬ。オーウエンの企ては私的のものであるから、今交換所は不足せる生産物を市場より買入れ得べしと假定し、又は他の交換所(オーウエンの農村)より獲得すると假定すれば、交換所は永遠に補填し得ざる損失を受けねばならぬ。蓋し此らの物は無用なる物を生産せる者によりて消費せらるゝからである。もし此の損失を未然に防ぐために、交換所はそれらの生産物の價格を高むとすれば、それは、總ての物は體化せられたる勞働量に依りて評價せらると云ふ基本原理を打ち破ることに等しい。交換所が私的企業なる場合には、此らの損失を未然に防止し得

るよう定められたる価格は市場のそれより著しく高かるべく、組合員を集め得べき筈があり得ない。もし又損失を未然に防がんが爲めに、交換所が無用なる物即ち利用無き物を斥くるとする。如何にして之を行ひ得るであらうか。かゝる物に對し労働切符を引渡すを拒否するか、又は之らに極めて僅かの労働切符を與ふるか、只此ら二つの途しかあり得ない。而して此ら何れの場合にも、總ての物は體化せられたる労働量によりて評價せらるてふ基本の原則を捨てたることとなる。蓋し此らの何れの場合にも投ぜられたる労働量の労働切符を與ふるものでは無く、また無利用の物を排斥して、物の評價に所謂利用に依る見方を入れて來てゐるから。

此の第二の欠點は別な言葉を以て云へば、生産と消費の不適合と云ふことである。投下せられたる労働量を以て物の價值となすときは、需要の方向を考ふことなく無用の物を製造したる者も、有用の物のみを需要し消費するから、そこに生産と消費（需要）の不均衡が生じ得る譯である（註）。

（註） M. Bourguin, *Les Systèmes socialistes et l'évolution économique*, (ed. 1921) chapt. IV. 參照。

此生産と需要との不均衡はオーウエンの企が私人的なるが故に一層著しい。即ちオーウエンの企を喜ばず、其滅亡を希ふ商人は労働切符を生産者（オーウエンの）より多額に買ひ占め、之を交換銀行に携へて或物のみを多數に需要すれば、交換銀行は其貨物の引渡をなす能はずして、労働切符

は下落を免れない。かゝる下落を免れんとすれば、交換銀行は生産を獨占せねばならぬ。

一八三三年九月三日倫敦に開かれたる The Equitable Labour Exchange (假に勞働交換銀行と云ひ置く)は、オーウエンの思想に據り、勞働切符を作りて勞働と勞働との交換の實を擧げ、生産と消費とを無限に進展せんことを目的としたのであつた(註)。而して其失敗は投ぜられたる勞働量に依りて物の價值を、自由競争の經濟組織のうちに於て、定めんとするシステムの實行の不可能を證明するものである。

(註) 勞働交換銀行が如何なる經過を経て設立せらるゝに至つたか、其設立に當りオーウエンのなしたることが如何なるものであつたか、筆者は詳しく之を知り得ないのを遺憾とする。これらに就き、讀者はバルグレーヴの辭書中より何らかの暗示を得らるゝかも知れぬ。

勞働交換銀行は株式會社であつて、一株二十志にして此の拂込に對し四十時間分の勞働切符を交付せられた。此交換銀行は生産者より生産物を受け、之を勞働時間を以て評價し、評價せられたる時間分の切符を交付した。切符は交換銀行にて此切符に相應する價值ある物と引換へられる。(交換銀行は經營費と僅少の配當金を支辨する爲め、若干の頭剔ねをなす。)

既に述べたように勞働の量を抽象的に決定することは頗る困難であるから、之を計量するに勞働

の持續の時間單位數を以てするは已むを得ない。然し労働は等質ではないから、労働交換所は労働の一時間を、總ての職業の平均賃銀を以て得たる貨幣額六片にて表した。

一時間の労働は一率に六片なりと定むれば、現に此より低い賃銀を受くる者のみしか生産物を持ち來らぬであらう。然るにオーウエンはかく考へない。彼は云ふ、『此の價値の尺度が全國を通じて同一なることは大いに望ましいことであるけれ共、現在に於てはそれは不可能である。職業により賃銀は十志より一志の間にある。平均五志である。労働の持續時間も様々である。これをも同一に歸一せしむるのが便利である。今日日の労働時間を十時間とし、一時間六片を單位とする。只問題は此れ以上の賃銀を受くる者が此れ以下の賃銀を受くる者と同一條件で労働するか否かにある。されど少しの所得しかない労働者の労働も、職業の全體系を構成するに必要なことを、彼らにして考ふるに至らば、彼らは何らの反對をなさざるべし』(註)と。

(註) The Crisis, vol. I, p. 60. Dolléans, op. cit., pp. 277—278. エルレンス教授は右の引用句に直ちに語を次いで、次の如く云ふけれ共、それが教授の解釋であるか、又はオーウエンの見方であつたか、確かむる方法がない。『總ての事實の組織が、生産物に含まるゝ労働によりて生産物の交換をなさしむるを得るまで、各々異なる賃銀を、尺度たる十時間五志の労働の一時に替ふるを便とする。例へば一日十時間二志六片を受くる労働者は尺度の五時間に等しい。五志六片の賃銀は十五時に等しい。』バドモリアにも同様の記述がある。

他方に於て勞働に用ひられたる原料、勞働者が商業により買入れたる原料を、直ちに勞働時間にて表すは不可能であるから、交換銀行は金屬貨幣にて評價せられた原料の原價を一時間の勞働即ち六片にて換算する。交換銀行は生産物を携へ來れる者に對し、此物に投ぜられたる勞働時間を質問したる後、此物の内在的價值を評價する。即ち勞働時間に換算せられたる原料品の原料と投ぜられたる勞働時間を評價する。然し其評價は銀行の任意のものであつて生産者の申出に據るものとは限らない。此場合に銀行が生産者の誇張せる申出を其まゝ受け入るれば、評價を高からしめ、銀行は損失を受くる危険があり、反對に低く評價すれば、生産物を携へ來る者を減ずるか又は彼らの不満を招ぐ。衣服を作り來れる不満なる仕立屋ありし時、オーウエンは之に對ひて曰く、『物の我らの眞の評價を支配するものは最も安い時價である。誰人も安く買ふを欲する。我らもし他の者の如く低廉に販賣するに非れば、誰人も來らざるべく、もし誰人も來らざれば、我ら生産者の來るべき理由がないであらう』(註)と。終局交換銀行は生産者の携へ來れる物の需要を考へ、利用無き物を排斥し、利用ある物のみを引受け、且つ商人と同じ方法にて評價したのである。されば勞働を價值の尺度となすてふ基本原理を支持するが如く伴りて、實は現存の價值を勞働時間六片にて換算したものに過ぎない。

(註) The Crisis, vol. II, pp. 89 et 90. Dolléans, op. cit., p. 291.

評價を了れば労働交換銀行は受入れたる生産物に對し、一時間六片單位の労働切符 Labour notes を交付する。此切符を受けたる者は之を以て交換銀行に存在する生産物と交換することが出来る。

倫敦市 Gray's Inn Road に開業するや、忽ちにして生産物の携へらるゝもの殺到し、此交換銀行は十五日にして引受け物件の過多なる爲め、水曜日の午後より月曜日の朝迄閉鎖せられた。また間もなく、少額の預人の増加は業務の進行上支障あるが故に四十時又は二十志以下の生産物を引受けざる旨を The Crisis 紙上に發表した。次いで二箇所支店を設けた。また一八三二年十一月三十一日の同紙は一週平均三萬六千時間の生産物の引受あることを報じてゐる。

然し乍らかゝる銀行は、先に述べしが如く、それ自體に危険なる萌芽を有する。その消滅を欲したる商人等は利用あれ共直ちに需要の無いような生産物のみを預け入れた。銀行は其の品質の下落と價值の減少との悲惨なる損失を蒙らざるを得なかつた。かゝる生産物の引受け額は常に需要を超過するに反し、不足する物もある。商人のもち行ける労働切符は過大量の貨幣と等しく下落する。殊に不充分にしか銀行に存在しない物の需要が増加するとき、労働切符は當然に下落する。労働切符の發行過剰は不可能の如くであつたが、事實に於て發行は過剰となつた。鑑定者も生産物の利用

と品質の鑑定を誤ることもある。引受けられたる物は、市場にて賣買し得ないような欠點ある物のみであつた。

之に依て見ると、かゝる事情を生ぜしめたるものは商人の反對運動であり、鑑定者の技倆の不足であると同時に、また労働に直接の獲得力を與へんとする機關に内在的缺陷なのである。まことに労働交換銀行は不況に陥り、引受けたる生産物を持ち餘し、一八三四年六月七日、設立後二年を経ずして、其終末を *The Crisis* に依りて告げらるゝに至つたのである。それは明に生産と需要、生産と消費の適合をなし能はずして倒れたのである。貨幣無き組織の下にありては、我らは生産を獨占し、消費を強制するに非れば生産と消費の均衡を期し得るものではない。如何に統計を精密にするも、現在の我らは需要の種類や強度を正確に豫測し得るものではない。加之、生産物を労働交換銀行に預け入れて労働切符の交付を受くるには、先づ以て其の生産物を所有してゐなければならぬ。必要なる生産手段を有せざる労働者は生産をなすことが出来ないのである。かくてオーウエンが労働交換銀行の設立の趣意書に、『農民・造園師・職人・食料品・卸小賣商は公平に其商品を處分し得るに至るであらう。即ち人間は労働に於ける等價に對し労働の等價を受くるに至るであらう……』（註）と約したる歡喜は、現實の夢と消れたのである。

(註) Auncy, Les systèmes socialistes d'échange, pp. 71—72.

四

以上我らがオーウエンの労働交換銀行に加へたる批評はマルクスが Bray 及び Gray に加へた批評を相去る遠からざるものである。マルクスは *Misère de la philosophie* (1847) に於てブレイを評し、*Zur Kritik der politischen Ökonomie* (1859) に於てゲレーを評したが、實は彼はブレイにもゲレーにも在らざる所のものを評したのであつて、彼の批評は批評の的を失へるものである。即ちマルクスの批難を受くべき者はブレイ、ゲレーに非ずしてオーウエンなのである(註)。

(註) 筆者はブレイの著作もゲレーの著作も見ることが出来ぬ。以下總てオーキエ教授の叙述に従ふ。オーキエ教授自身は Foxwell の叙述に據つたものである。其他 Lowenthal, *The Ricardian Socialists*, pp. 47 et suiv.; pp. 84 et suiv. 及び津田誠一君「リカルド派社會主義概論」三田學會雜誌第十八卷に簡單なる紹介がある。

先づマルクスは *The Equitable Labour Exchange* がブレイの影響の下に設立せられたと説くけれども、それが誤であることは Foxwell が指摘せるが如くである。Foxwell は曰く、「マルクスは労働交換銀行の設立をブレイの影響によるものなりとしてゐる。然し此の銀行は一八三二年オーウエン

が設立したものであり、其思想は既に一八二一年よりオーウエンのうちに胚胎してゐる。余はブレーが此らの銀行を考へたのを見ない。ブレーの組織は全く別なものである』と。

ブレーは印刷職工であつたと云ふ他、彼に就て何ものも知られてゐない。彼は一八三九年 Leeds にて主著 *Labour's Wrongs and Labour's Remedy* を出版した。Foxwell が云ふ所に據れば當時労働者の希望は總て政治的にして、ホイグ黨の政權掌握のみを願つてゐたのであつた。ブレーの目的は政治的變化が社會改良を保證する力なきことを示すにあつた。Foxwell は曰く、『ブレーは惡の根源は交易の不平等の原理のうちにあると云ふ』と。そのみならばオーウエンとの相異が無いやうであるが、然しブレーは進みて労働階級の服従の原因の真相を捕へてゐる。彼は曰く、『労働階級全體は労働の手段に就て、從て生活の手段に就て、資本家及び雇主に從屬してゐる。…資本家・地主等は労働の一週間の報酬として、前週彼の労働より得たる富の一部を與ふるに過ぎない』と。かかる状態に對しブレーは土地及び生産手段の共有と労働に基く分配とを提唱する。『等しい労働は其労働の如何を問はず、等しく報酬を與へられねばならぬ。労働の社會的價値の不平等は報酬の不平等の理由としては不充分である。』

かくブレーは資本の共有を提唱し、労働を等質と見て、労働時間を分配の原理となさんとするの

であるから、所謂集産主義者である。

ブレイは實行の上に於ては過渡的方法として、大組合を考へる。大英國の五百萬の生産者は各百人乃至千人宛の生産組合を組織する。此らの生産組合は賃借又は購入によりて土地及び資本の所有權を獲得し、各組合員は提供せる労働者によりて其分配を受く。此土地其他の生産手段を得る爲にブレイは生産物に對する切符即ち資本家に代價として與へらるべき切符を作らんことを提唱する。

此切符は労働者の共同の債務であつて、二十億磅まで發行せらるべしと云ふ。『かくの如くにして生産物の個人的所有權と生産力の共有とが並存し得るであらう』とブレイは云ふ。觀來りて我らはマルクスが、生産に觸れずして交易組織のみを變化せんとしたとブレイを批難し、又労働交換銀行に影響を與へた者がブレイなりと云つたのが不當なる事を知る譯である。『労働の等量の交換が我らに與へしものは何であつたか。生産過剰であり、下落であり、労働の過剰であり、次で生ぜる失業であつた』とのマルクスの批評が加へらるべきはブレイに非ずしてオーウエンである。

マルクスは *Zur Kritik der politischen Ökonomie* (1859) に於て再び同様の批難をブレイに加へる。ブレイは商舖の雇人であつた。彼は幼くして倫敦の或大商店の手代となり、地方に派出せしめられるのを常とした。彼は *The National Commercial System* と云ふ亂暴なわけの解らぬ一書を著した。

人々はグレイに之を出版しないよう勸告した。それに感ずる所あり、彼はオーウエンの諸著を讀み、一八三一年 *The Social System* を著した。更に彼は *An Efficient Remedy for the Distress of Nations* (1842), *Lectures on Nature and Use of Money* (1846) を著した。グレイ自らは全體としても、詳細な部分に於ても何人の思想の影響も受けないと云つてゐるが、然し彼のシステムがオーウエンのそれに類似せることは争はれ難い。グレイの主たる目的は恐慌を避けんとするにある。彼は恐慌の原因は貨幣に基礎を置く交易組織にあると考へ、貨幣の仲介を廢止するシステムを考へた。"Yet it is obvious that it agrees to a large extent with the program of the state socialists of to-day. It provides virtually for the state control of industry....."(註)

(註) Lowenthal, *The Ricardian Socialists*, p. 60.

然るにマルクスはグレイの組織を記して、『中央銀行が其支店と協力し、各種の商品の生産に投ぜられたる労働時間を確かめ、此らの商品と交換に價值の公の證明書即ち各商品に含まるゝ労働時間の受領書を生産者に交付す。労働の一週・一日・一時間等を表す此らの切符は銀行の倉庫のうちにある他の總ての商品を受くるを得る等價を示す』ものであると云ふ。此れは明にオーウエンのシステムであつて、グレイのそれではない。さればマルクスのグレイに對する、"Gray's imagine que

les marchandises peuvent se comporter directement l'une à l'égard de l'autre comme des produits du travail social. Mais elles ne peuvent se rapporter l'une à l'autre qu'en vertu de ce qu'elles sont. Les marchandises sont des produits immédiats et de travaux individuels, indépendants et isolés, qui doivent s'affirmer comme du travail social général par leur aliénation dans le processus de l'échange individuel, ou le travail, dans la production marchande, ne devient travail social que par l'aliénation universelle des travaux individuels. Le dogme que la marchandise est de la monnaie directe ou que le travail particulier de l'individu contenu en elle est directement du travail social, ne devient pas une vérité parce qu'une banque y croît et opère selon lui. Le faillite, dans ce cas, jouerait le rôle de critique.”(註)の評はオーウェンに向けらるべきである。此批評は特有のドイツ流の筆法であつて把握に困難であるが、要するに労働による価値の決定は労働の社会的利用の組織化を条件とする、即ち労働の組織による生産と消費の豫めの適合を条件とすると云ふ意味である。

(註) Marx, *Mièstre de la philosophie*, ed. 1922, Appendice II, p. 237 et suiv.

(附記) 本稿を草し終つて若干日の後、河上博士の社會問題研究第十四冊以下にオーウェンの研究があることを高松勤教授より聞くを得た。早速それを一讀したが、教へらるべきものは何ものもない。

